

2015年7月27日

「経済学入門 A」2015年度第1学期筆記試験問題

<本試験において持ち込みを許可するもの（掲示したものの再確認）>

A4の紙1枚。文字や図表を両面に手書き，印刷，コピーで書き込んでよい。ただし，別の紙や，その他のものを貼り付けてはいけない。

<問題用紙について>

この問題用紙は全3ページである。落丁・乱丁は交換するので監督者に申し出ること。

<解答用紙の使い方>

解答にあたっては，解答用紙に以下のように問題番号を書き，その右側に解答を記入すること。

(例) 必ず以下のように縦に並べること

I

1 a

2 b

3 a

……

II

商品交換においては……

<問題> (100点満点)

I 以下の文章を本講義の内容と一致したものにするためには，下線部付き空白部分に a, b, c のいずれを挿入すべきか。アルファベットで解答しなさい (5×8=40点)。

*商品の価値は，(_____ 1 b _____) によって決まる。

- a それを生産するもっとすぐれた労働力の支出する労働量
- b それを生産するのに社会的平均的に必要な労働量
- c それを消費した場合に消費者が受け取る効用の大きさ

*本講義の担当教員は，資本主義社会を3つのシステムに分裂しながら統一しているものと把握している。それは，労働のシステム，物象(商品・貨幣・資本)のシステム，そして(_____ 2 a _____) である。

- a 所有のシステム

- b 交換のシステム
- c 人間のシステム

* 貨幣の機能は、価値尺度、価格の度量標準、（ 3 b ），本来の貨幣である。
本来の貨幣の機能には、蓄蔵貨幣、支払手段、世界貨幣が含まれる。

- a 決済手段
- b 流通手段
- c 補助貨幣

* いま、流通必要貨幣量が定まっており、これが一定の金量 X トンであらわされ、それが価格としては Y 円であったとする。流通する貨幣はすべて国家紙幣であるとする。ここで仮に、流通する商品量と貨幣の平均流通回数は変わらないままに政府が国家紙幣を増刷し、その総額が 2Y 円になったとすると、（ 4 b ）。

- a 2Y 円のうち流通に必要とされる Y 円だけが流通し、残り Y 円は蓄蔵貨幣となる。Y 円が代表する金量も価値量も変わらず、物価水準は紙幣増刷前と変わらない。
- b Y 円でなく 2Y 円が流通必要金量 X トンを代表するようになる。これはすなわち、同量の金量が表している価値量が 2 倍の価格によってあらわされるようになるということである。そのため、物価水準は紙幣増発前の 2 倍に上昇する。
- c 一方では、Y 円でなく 2Y 円が流通必要金量・必要流通貨幣量を代表するようになる。他方、2Y 円の紙幣は以前の 2 分の 1 の流通速度で流通するようになり、貨幣の平均流通回数が半分になる。前者は物価を 2 倍に上昇させる作用、後者は物価を半分に下落させる作用を持っているため、相殺し合って、物価水準は紙幣増発前と変わらない。

* 個別資本間の競争において、優位な生産諸条件をもつ資本のもとで生産される商品の個別的価値は、社会的価値（ 5 c ）。

- a と等しい
- b よりも大きい
- c よりも小さい

* 本講義の担当教員が強調したところによれば、（ 6 b ）はつねに資本主義的生産様式の基本形態である。（ 6 b ）の発展により労働の社会的生産力が向上し、労働の社会的性格が強まって行く。

- a 分業
- b 協業
- c 機械制大工業

*資本構成の高度化を伴う資本蓄積が進行すると、労働需要は増加するが、それには二つの条件が付く。まず、(7c)
資本増加率よりも労働需要の増加率は低くなる。次に、構成高度化は機械の利用によるものであるから、労働強度が引き上げられる可能性が高く、その分だけ雇用される労働者の増加率は労働需要の増加率より低くなる。

- a 蓄積の進行とともに、生産物価値に対する必須労働の比率が小さく、剰余労働の比率が大きくなるので、
- b 蓄積の進行とともに、必須生活手段の価値が低下して、したがって労働力商品の価値が低下するので、
- c 蓄積の進行とともに、総資本に対する不変資本の比率が大きくなり、可変資本の比率が小さくなっていくので、

*資本主義的生産がいったん確立されると、資本も労働力商品も、資本・賃労働関係も再生産されるようになる。しかし、資本主義的生産が始まるためには、まず商品流通が広まっていなければならない。そして、一方では、直接的生産者が生産手段から切り離され、労働力を販売する以外に生存の道がないような状態に置かれなければならないし、他方では、社会の別の集団に生産手段または貨幣の形態で富が集積しなければならない。資本主義的生産に先行して生じるこれらの過程を (8a) という。

- a 資本の本源的蓄積
- b 資本家的生産過程
- c 産業予備軍の生産

II 以下の問いに答えなさい。

本講義で講義した政治経済学（社会経済学）の理論モデルにおいては、資本主義社会では商品の等価交換の原則が厳密に貫かれていながら、労働者は資本家に搾取されている。このようなことが、なぜ、どのようにして可能になるのか。説明しなさい。説明の中では、「労働力」と「剰余価値」という言葉を必ず使うこと。必要と思う字数は各自で判断すること。制限はない(60点)。

1) 資本は剰余価値の生産と取得を通して労働者を搾取する。そのため、資本の成り立ちを理解するためには、剰余価値の生産と取得のメカニズムを明らかにしなければならない。

2) 資本とは $G-W-G$ という商品流通の過程で自己増殖する価値である。すなわち、 $G-W-G$ の2番目の G (貨幣) は、最初に投じられた G よりも価値が大きくなっていなければならない。しかし、これは商品流通の過程であるから、等価交換の法則が守られなければならない。つまりここには、等価交換から増殖しなければならないが、等価交換では増殖できないという矛盾がある。

3) この矛盾を解決するためには、2番目の W (商品) が、消費すると元の価値を上回る価値を生むような使用価値を持つ商品であることが必要である。そのような唯一の商品が労働力である。労働力とは、労働者が持つ労働する肉体的・精神的能力の総体である。商品経済では、労働によって商品価値が生まれる。よって、資本家が労働力を商品として購入して消費するということは、すなわち労働者を雇って自らの指揮下で働かせるということであり、それによって商品が生産され、価値が生まれるということである。

4) 労働者が商品になるためには、労働者は、一方では人格的に自由でなければならず、他方では生産手段から遊離していなければならない。この条件が満たされるときにだけ、労働者は労働力を商品として売らざるを得ない条件に置かれ、資本家は労働力を購入することができる。

5) ただし、労働力商品の売買は、通常の商品のように所有権を譲渡する形では行われぬ。それでは奴隷制になってしまう。そうではなく、時間決め賃貸借という形で行われる。資本家が労働力商品を購入して消費するとは、1日の労働時間(労働日)を定め、時間決めて、資本家の指揮・監督下で労働者が働くことである。

6) 労働力商品の価値も、他の商品と同様に、それを生産するのに必要な社会的必要労働時間によって決まる。しかし、労働力商品は資本主義的に、工場で生産されるわけではなく、労働者の消費生活を通して生産される。労働者は消費生活において必須生活手段を消費することによって、労働で消耗した労働力商品を再生産する。だから、労働力商品の価値とは、労働力を再生産するために必要な必須生活手段の価値に等しい。この価値には、生活費、養育費、修業費が含まれる。生涯の労働力再生産費から労働力商品の総価値が定まり、そこから労働力の単位時間当たり価値、例えば日価値も定まる。

7) ここで問題を1日単位で考えてみると、労働力の日価値は、労働力再生産のための必須生活手段を生産するために必要な労働時間(必須労働時間)によって左右される。一方、1労働日の労働が生み出す価値は1労働日あたりの労働時間によって左右される。両者はまったく別のものであり、違う大きさになることができるのである。そして、資本家は労働力の日価値を払うことによって、労働者を1労働日働かせる権利を持っている。そこで資本家は、労働者を、労働力の日価値を上回る量の価値を生み出すまで働かせる。この、労働者の1日の労働が生む価値のうち、労働力の日価値を上回る分を剰余価値と呼ぶ。一般化すれば、剰余価値とは、労働者の労働が生む価値のうち、労働力価値に等しい量を上回って生産される価値である。

8) 剰余価値は資本家に取得される。商品の生産過程では、資本家は自ら所有する生産手段を、購入して時間決め使用権を得た労働力を使って生産しており、したがって生産物も資本家のもの

だからである。生産物の価値は、生産手段の価値が移転された部分と労働者によって新たにつくられた部分からなり、後者はさらに、労働力の価値に等しい部分と剰余価値からなっている。剰余価値は生産物に体化されているので、生産物とともに資本家のものなのである。

9) この時、労働者の労働のうち、労働力価値に等しい分を生産した労働は、彼／彼女が必須生活手段を買い戻すことを可能にする労働であり、必須労働と呼ばれる。そして、この部分の労働は対価を払われているので支払労働とも呼ばれる。これに対して、剰余価値分を生産した労働は剰余労働と呼ばれるが、こちらは対価を払われていない。つまり不払い労働である。

10) ここでは、労働力商品の価値は資本家によって払われているのであり、商品の等価交換の原則は厳密に貫かれている。しかし同時に、労働者（直接的生産者）の必須労働を超える労働の成果が資本家に取得されており、労働者は資本家に搾取されているのである。

※以上のことがすべてきちんと書かれていれば配点の 90% = 54 点。いくつかの論理が抜け落ちていたり説明が雑であったりすると減点。3) 4) 6) 7) 10) は重要なので抜けると減点幅が大きい。

とくに 7) が重要。7) が説明されていないと致命的であり、他のことがいくら書いてあっても、最大 30% = 18 点程度しか与えない。逆に、7) がそれなりに説明されていれば、50% = 30 点以上は与える。説明に当たり絶対に不可欠なことは、「資本家が労働者を、労働力の日価値を上回る量の価値を生み出すまで働かせることによって剰余価値が生まれる」ことの指摘である。。

なお、8) の論理は教科書、授業とも説明が丁寧でなかったため、落ちていても減点しない。いきなり絶対的剰余価値論から説明した場合は高得点は得られないが、「労働力の日価値に等しい価値よりも多くの価値を生産するまで労働時間を延長すること」が説明されていれば、事実上 7) が書かれているとみなして、50% = 30 点を与える。相対的剰余価値や特別剰余価値をいきなり論じた場合は 7) が抜け落ちるので、最大 30% = 18 点となる。

60% = 36 点の範囲に入っているうえで、搾取の度合いを示す指標が剰余価値率であること、労働者と資本家の相互依存、絶対的剰余価値と相対的剰余価値、労賃形態による搾取の隠ぺい、資本と労働の再生産などを論じたものには加点する。

なお、I の選択問題は全問正解しながら、II の点数が足りずに不合格、あるいはぎりぎり合格となった答案が多数あった。大学生として、長文の記述問題に論理的に解答できるようになることを望む。

※修正記録：「労働力の日価値」を「労働量の日価値」と2か所誤記していたのを修正した。